

## 寒さの形と音 寒さの可視化)

### 風花光柱や凍列・・・

三日は節分、四日が立春で暦の上では最も寒い大寒からの季節に終わりを告げて、光の春』が『足さきに忍び足でやつてくる。暖冬続しが『転して連日大雪に見舞われ、今年の寒さはことのほか厳しい。

吐く息が白くなり一面の霜がいつしか霜柱の微細なガラス細工に変わり、木枯らしとともに時雨がミヅレに変わりいつしか霰から雪となる。湿ったボタン雪が美しい六華の結晶から粉雪となり、針状結晶や砲弾型、鼓形の微結晶ともなれば低温も最たるものとなる。虎落笛が澄んだ音色を響かせ、海の波が碎けて白い泡のようになる『風花』が舞い乱れる・・・。

こうした寒さの感覚を、映像や音で捕らえるとしたら、さらにどんなものがあるだろうか。

寒さとともに池の表面は蟬(せみ)の羽根のような透明で薄い『鱗氷』が張り、次第に厚くなつて氷の橋となる。信州の諏訪湖や北

海道の屈斜路湖の全面結氷した湖面では、厳しい冷え込みとともにジグザグと下裂け目が走つて走る裂け目で氷丘列、『御神渡り』が見られる。明け方冷えた陸からの溢れだし、寒気が『渦あらし』となつて海を瀧のようになり、小さな蓮葉氷が次第に大きくなつて、縁をめくりあげながら成長して海をうめ尽くし、オホツクの海には流水が生まれ押し寄せ流水野となる。

天空のオリオンが沈み、冴え渡る茜色の空を仰ぎ見れば青白い月の影が薄く浮かび、まだ薄暗い森からは厳寒で生木が裂ける『凍裂』の音が斧を打ちおろすがごとく響き渡る。風邪が止まつた盆地にはダイヤモンドダストが幽玄の舞いを見せて、太陽の光を回折して『咒柱』を造り『幻日』を左右に従え浮かばせる。

冬枯れの木々は細い枝々がガラス細工のような霧氷の白装束を着飾つて茜色の朝日に輝きゆれている。さらに低温ともなれば、吐く息が耳もとで凍るときに聞こえる『星の

ささやき』となる。

国内の観測所での低温の記録はマイナス四十一・五度。ダイヤモンドダストの『天使のささやき』が聞こえそうな北海道の美深(ゼフカ)で六十五年前に記録された。

(一九九六年二月三日)